

## 第2章 「福祉・ホースセラピーに活用されている馬」

### 福祉・セラピー

乗馬トレーニングで歩けるように...

特定非営利活動法人  
**北海道障がい者乗馬センター**

利用者も運営者も喜びを分かち合える世界の実現に向けて



### 活動の概要

元々は隣接する障がい者支援施設「光の森学園」の付属施設としてスタートし、15年活動したのち、平成20年6月よりNPO法人北海道障がい者乗馬センターに移行。会員数は88名。うち、継続的に活動している障がい者は25～30名。

乗馬を通じて、障がい者の自立支援への手助けとなることを最大の目的とし、自信と誇りの回復、活動的生活の支援、身体障がい者の身体の機能回復を目指している。

<活動内容>

#### 障がい者乗馬トレーニング（セラピー倶楽部員）

子どもの症状を見て内容を決め、グループレッスンを行っている。その際、保護者と面談し、一人一人に合ったレッスンプログラムを用意する。最終的には一人で馬を乗りこなすことを目指す。馬を介在した振動が脳や体幹に伝わって日常生活の動作改善に結び付けられるように意識している。

「障がい児（者）のための乗馬はただの楽しみではなく、トレーニングとして行なうべき」という信念の下で指導が行なわれている。1年前は座位も取れなかった小学生が、「乗馬トレーニングを重ねて筋肉が付いたことで、座位と姿勢保持が安定するようになった」といった事例がみられている。そのような障がい児の変化は、部班運動で他の子ども達と遜色なく軽速歩を何周も続けて

いる実際の状況を目の当たりにして確認することができる。また、クラブには10代半ばから後半の複数の青少年が所属しているが、各人がその度に指示を受けることなく、ごく自然に厩舎作業を行い、訪問者へのもてなしをしている。その中には、発達障がいがあり不登校だったが、自信がつくことで大人と話せるようになり、登校もできるようになった子がいることを知らされる。「指示なく」、「自然に」活動する子ども達の姿から、インストラクターと子ども達の間の強い信頼関係が感じられる。

#### その他の活動

- 1) 滝川市にある難病キッズのキャンプでの乗馬トレーニングプログラム（年間6回）
- 2) 札幌と滝川市の障がい者の交流キャンプによる乗馬プログラム
- 3) そらぷち業務委託（滝川市でのキャンプ（9回／年、毎回約30名が参加）、中空知地域体験乗馬（4回、毎回約20名が参加）など、地域との連携他に、児童の一般乗馬、馬介在セラピー指導（指導者研修）などを実施している。



落ち着いた環境に囲まれた馬場

## 活動体制

インストラクター2名（RDA インストラクター（英国）資格の有給・常勤職員1名、無給・非常勤職員1名）と団体理事長（運営面全般・無給・ほぼ常勤）の3名、ボランティア22名で運営している。事業規模は831万円（平成25年度決算）。

馬の飼育頭数は8頭。種類はクォーターホース（2頭）、北海道和種馬、シェトランドポニー、ハフリンガー、ファラベラ、トロッター、アパルーサで、年齢は3～20歳。体高は150cmまで。

◇騎乗者の体の大きさ、様々な障がいの内容に対応すべく、小さな馬からある程度の体高がある馬までを揃えている。反撞が大きい馬はトレーニングに有効と考え、状況に合わせてそのような馬を使うようにしている。反撞の小さな馬は馬上で騎乗者が安定しやすく、騎乗者自身が筋肉を使う機会を奪う傾向があるため、障がい者の状態によっては好ましくない場合もある。

## 施設の概要

札幌市郊外の大倉山ジャンプ競技場近くの盤溪地域に存在するが、センター施設のすぐ脇には小川があり、また背景には森があって自然の埒に囲まれて落ち着いた環境である。馬場は、セラピー活動を行う上でインストラクターが目を配りやすく、実質的に指導を行いやすい落ち着いたスペースとなっている。

## 背景（地域連携、展望等）

札幌市中央区は明治の初め以来、札幌の中心として計画的な街づくりが進められてきており、官庁や企業の近代的なビルが立ち並び、札幌の都市機能の中核となっている。

乗馬セラピー倶楽部は、観光スポットとして有

名な時計台から直線距離にして約5kmのスキー場のある山の入り口に位置している。そのため、利用者が気楽に徒歩や自転車で通うのは難しいが、そのことが周囲の騒音等に煩わされることなく集中してセラピーに取り組める環境につながっていると考えられる（自家用車利用であればアクセスにストレスは感じられない）。

当センターでは、以下の課題の克服を目指す。

1. 資金の確保（ボランティアにはせめて交通費位は出したい）
2. 会員数の増強
3. ボランティアの確保
4. 土日以外の事業化
5. 厩舎の建替え

<全般的な課題、要望>

- 1) 乗馬療法を医療の領域に定着させ、専門性を有する人々が生活できる経済的基盤の創生
- 2) 国内にいくつもある障がい者乗馬関連団体（協会）がまとまることを要望
- 3) 障がい児家庭は、子どもに障がいがあるという理由で父親が離れ、母子家庭になっている例もあり、月に13,000円という会費を支払うことに苦慮している。乗馬が障がい児の身体機能向上に有効であることがわかっているにもかかわらず、活動に参加しづらいこうした家庭が安心できる状況を作りたい。
- 4) 障がい者乗馬に向く馬の血（統）の保護を行っても良いのでは。

これらの点は、弱い立場にある利用者側から見た場合、馬の利活用において何が必要で、何ができるのかという調査、研究が求められていると言える。

.....  
〒064-0945 札幌市中央区盤溪 256-2  
(URL) <http://www.horsetherapy.net/lesson.html>  
(TEL) 011-623-5285